



ごあいさつ

独立行政法人国際協力機構
九州国際センター所長 村岡敬一

皆様、こんにちは。独立行政法人国際協力機構九州国際センター所長の村岡敬一です。昨年4月に所長の任を拝命し、着任いたしました。

九州での勤務は初めてですが、22年前に当センターの設立にかかわりました。開所式の記念に植えた若木がいまや大木に育っているのを見るにつけ、この間、当センターと九州各地の皆様との関係が若木の成長をなぞるように、より成熟した関係となってきたことを大変うれしく思っています。

さて、機構を取巻く国内外の環境につきましては、昨年12月24日に閣議決定された23年度予算政府原案では技術協力関連の運営費交付金が前年度比マイナス1.6%の1457.8億円、JICAが実施の一部を担う無償資金協力関連予算がマイナス1.5%の1591億円となっており、6.6%増、9500億円の事業規模が見込まれる有償資金協力勘定とあわせると全体で1兆1000億円を超える事業規模が確保される見通しです。他方、行政刷新会議による一連の事業仕分けにおいては、機構業務の意義や目的については理解をいただいたものの、業務の効率的運営や説明責任の重要性が指摘され、現在、見直すべきところは見直し、改めるべきところは改める作業に組織を挙げて取り組んでいるところです。

こうした予算のプロセスと並行して昨年6月に外務省より発表された「ODAのあり方に関する検討」では、国民の理解と支持のもと、引き続き戦略的効果的な途上国支援を行う実施機関として機構の強化が打ち出されました。同検討では、「開かれた国

益を増進」するために「世界の人々とともに生き、平和と繁栄をつくる」との新たな理念を示し、重点分野として①貧困削減(ミレニアム開発目標達成への貢献)②平和への投資 ③持続的な経済成長の後押し の3つの点に絞り込み、これらの分野へ日本の「人」、「知恵」、「資金」、「技術」を結集した開発協力の方針が提示されました。また開発協力に対する国民の理解と支持の促進のために、JICA に対し多様な関係者の「結節点」としての役割の強化を求め、当センターを含む国内拠点、JICA 関係者等をフル活用し、ODA 広報、交流・会議のための場所の提供、シンポジウムや研修の実施等に力を入れていくことを提言しています。

海外に目を向けますと、2000年9月の国連ミレニアムサミット開催を契機に「ミレニアム開発目標」が掲げられ、この目標は貧困や飢餓の半減、妊産婦の健康改善や乳幼児の死亡率低下、感染症の防止など8つの項目からなり、援助国側および被援助国側の双方が2015年の目標達成に向け取り組んでおり、昨年9月にニューヨークで開催されたミレニアム開発目標国連首脳会合には、世界約140ヶ国の参加し、達成状況の中間レビューが行われました。達成状況は目標と地域によって大きなばらつきがあることが確認されるとともに、我が国は菅直人首相が保健・教育分野で今後5年間に85億ドルの支援を表明し、残りの5年間、各国があらゆる手段を尽し目標達成に向け取り組んでいくこととなりました。

このように国際協力の重要性は増す一方で、JICAとしては国内の厳しい経済状況の中、より効果的効率的な事業運営を目指しています。国内における国際協力の最前線である九州国際センターは、九州における「結節点」としての役割の強化に向けて、熊本の皆様方からの理解と支持を得つつ、九州ならではの特徴ある研修事業や市民参加協力事業を推進し、開発への貢献に取り組んでいく所存ですので引き続きご指導ご鞭撻のほうどうぞよろしくお願い申し上げます。

2011年を新しいジャンプ台にして

熊本県 JICA 派遣専門家連絡会会長
赤木 洋勝

新年明けましておめでとうございます。

暮には、恒例の漢字一文字選に「暑」が選ばれました。今や、良いことも悪いこともグローバル化が急速に進んでいます。気象異変一つをとっても人類の営みが原因と見られ、昨年も世界のあちこちで災害が発生しました。多くの命が奪われ自然や生活環境に甚大な爪跡を残しています。

こんな閉塞感の続く中、秋には二人の日本人がノーベル化学賞受賞に輝き、私たちに希望を持たしてくれました。また今ひとつ忘れられない出来事は、8月のあのチリの鉱山落盤事故です。世界の科学の粋を集め、人種や宗教、国境を越えた3ヶ月に及ぶ救出劇は人々を歓喜に包みました。世界の国々か

ら日本の科学技術は今や高く評価されています。JICA派遣専門家としての私たちもさらに技術を磨き、人々の足元の幸せに繋がる支援に卯年のあついジャンプをして参りましょう。

ところで、本会はこれまでも自主的な運営により活動を続けてきたところでありますが、いまやその主たる機能を「途上国援助経験の社会還元を含む国際協力に対する市民の理解促進活動」と位置づけ、専門家としての豊富な経験を活かし啓蒙活動を通じて広く国際協力に対する地域市民の意識を高め、次世代の担い手となる人材育成に寄与することが求められています。その使命を果すべく地域の各 JICA 活動団体との連携を密に活動を続けて参りたいと願っています。会員の皆様の積極的なご協力、ご参加をお願い致します。

平成 21年度 総会

21年度総会は、平成 22 年1月 30 日(土)、熊本市国際交流会館にて、来賓・会員20名の参加で開催されました。会務報告に続き、恒例の会員による講演会を行いました。講演は「ところ(国)変われば・・・」岡本 英一会員(前・農水省国際農林水産業研究センター)と「フランス領ギアナにおける水銀汚染調査」松山 明人 会員(環境省国立水俣病総合研究センター)の2題でした。(写真)

講演会終了後、会員の交流親睦を行いました。



平成22年度 熊本県 JICA 派遣専門家連絡会 活動記録

年 月 日	行事内容	場所
22 3 6	鹿児島県連絡会総会にて講演「熊本県連絡会の活動」(藤本会員)	鹿児島・敬天閣
	27 パネルディスカッションにパネラーとして出席(藤本会員)	国際交流会館
4 10	シニア・青年協力隊写真展参加(藤本会員)	鶴屋
	27 熊本県国際協会総会出席(藤本・赤木会員)	交通センターホテル
10 16	青年協力隊報告会出席(藤本会員)	国際交流会館
11 6	PCM研修会参加(石島会員)	ウエルパ熊本
	13 PCM研修会(石島会員講演)「プロジェクト技術協力事例紹介ーパラグアイ小農野菜生産技術改善計画」出席(金指・藤本・赤木会員)	国際交流会館
12 11	青年協力隊懇談会出席(石島・入口・藤本・赤木会員)	熊本市花ぐるま
23 1 23	青年・シニア帰国報告会出席(石島・入口・藤本・赤木会員)	パレア

日本人の心と欧米・アジア

熊本大学総合情報基盤センター 入口紀男

日本でも、ビジネスの世界に契約書の作成は欠かせませんね。日本の契約書には「協議条項」という特殊な条項が書かれることが普通です。それは、「本契約に定めのない事項および本契約の解釈につき疑義を生じた事項については、甲乙誠意をもって協議し、友好的解決をはかるものとする」といった内容の条項です。契約の当事者である甲も乙も、これから結ぼうとする契約書にこの協議条項があることを確認して初めて安心して捺印することができます。

では、米国に日本の契約書でいう「誠意」の概念はあるでしょうか。正解を先にいうと、ありません。米国人にとって、日本人のいう「誠意」は、全く意味不明です。日本の契約書に見られるような「誠意」は、世界で普遍的に通用するものではありません。しかし、「誠意」こそは人倫の基本ではないでしょうか。国が異なっても、同じ人間で「誠意」が通じないはずはないのではないでしょうか。「誠意」が通じなければこの世は闇ではないでしょうか。それでも、米国に日本の「誠意」の概念はないのです。日本人は「誠意」の限界を自覚することが必要なようです。

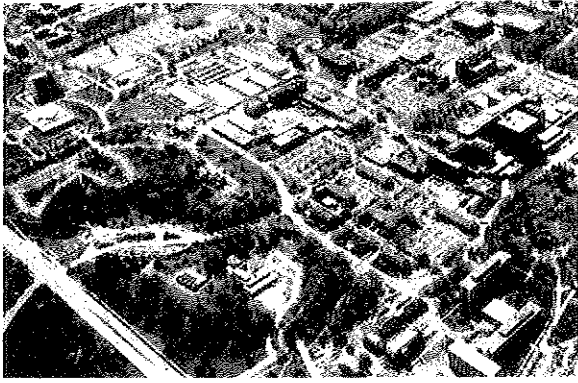
欧米の契約書には、日本の「協議条項」の代わりに多くは「完全条項」という条項が書かれます。それは、「この契約は両当事者のすべての合意を構成するものであり、これ以外に約束は存在しない。また、この契約は両当事者が以前になしたすべての意思表示および合意によって代わる」といった内容のことです。契約の当事者である甲も乙も、これから結ぼうとする契約書にこの完全条項があることを確認して初めて安心して署名することができます。

記紀万葉のこの日本では、八百万の神々は細部に宿ります。正義とは場の空気です。「うち」と「そと」が峻別されます。すべては個人的な人間関係の中で行われます。約束・職務・役割は、黙示的な「誠意」の上にしか成り立ち得ません。一方、欧米では絶対的な真理(普遍的な形成知)が天地を定めているようです。普遍的な約束・職務・役割が存在します。グローバル化とは、「うち」「そと」を守る境界の消失(ボーダーレス化)です。グローバル化とは、標準化、普遍化、形式知化(暗黙知でなく)であるようです。そのような中であって、私たちはいったいどのようにして国力を保ち、増進させ、また、個人として生きていけばよいのでしょうか。

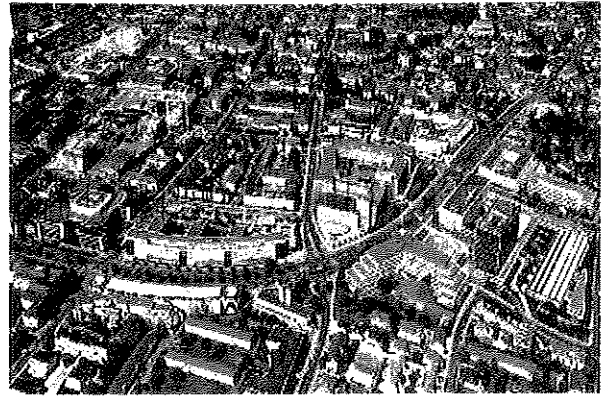
一つの解答は、日本人として記紀万葉の心を持ち、「聖典の民」(ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒)を理解し、聖典の民と協力しかつ競争し、グローバル社会、知識経済下で生きていくことにあるようです。

筆者は1947年水俣生まれで64歳です。24歳から55歳まで旭化成に勤めました。その間に、28歳のときから31歳まで米国(イリノイ大学・NIH)に留学しました。41歳から51歳まで独国シーメンス社に出向しました。55歳のとき熊本大学に任用され、最近の4年間はJICAのインドネシアのプロジェクトに組み込まれて現地の人たちと仕事をしました。私の仕事は、インドネシアの研究者にインドネシア特許・実用新案を出願させることでした。

現在はJICAのベトナム(ホーチミン工大)で同じような仕事をしています。



教育厚生省 NIH(米国ワシントン市郊外)1977



シーメンス AG (独国エルランゲン市) 1990



マタラム大学 (インドネシア国ロンボク島) 2006



スラバヤ工大 (インドネシア国ジャワ島) 2007



マナド (セレベス島北端) でカラオケ 2007



ジャカルタの高等教育庁 (ジャワ島) 2008

インドネシアには多くの島々があります。島の数だけ固有の文化があります。島々には古来の神さまがいて、神さまは子どもの髪の毛の一本一本に宿っています。でも、多くの国民はイスラム教徒です。街では未明からお祈りの大音響が鳴り響きます。古来の森羅万象の神々をあがめることは、イスラムの天地を創造した唯一神をないがしろにする罪にほかなりません。インドネシアはそのような精神の狭間にあるようです。

でも、アジアは明るく、食べ物が美味しいですね。活力があって、いかにも生命の揺籃地帯というイメージがありますね。そんなお話をさせていただきたいと思います。

日本から見た海外の水産事情

元・(財)海外漁業協力財団海外派遣要員 汐月 卓也

モロッコ

1997(3ヶ月) 水産加工機器、タコ揉み機、燻製機、エビ殻剥き機 etc の取扱い、モロッコの人々の食習慣、イスラム教、フランス風の文化、アガディール市、国際リゾート地、高級避寒地、観光都市、軍港、スーク、現地の人々との交流、人口 6 万人に 20 万人の客

ウルグアイ

1997(1年) 水産加工、缶詰、燻製品、酢漬け品、魚の生食習慣無し、刺身・鮓、魚体処理、調理法の実技支援、水産加工(貝の缶詰工場、鮭鱒の燻製工場)企業への技術支援、チョウザメ養殖場の魚肉・キャビアの加工、国立大学獣医学部水産研究所の教職員&修士学生への講義・実習・実技指導、機器の設置・運用など定期的に行った。

チュニジア

2001(2.5ヶ月) 水産教育課程カリキュラム作成等支援・協力・助言、高等漁民訓練の教育機関で改善策等など支援、現地の聴き取り調査、現地視察、Work Shop の実施、鯛鱈鯖等の缶詰工場、鮪の処理、漁獲量の減少、零細漁民、途中からニューヨークテロ(2001.9.11)アフガンへの U.S.A の報復と日本 JICA の関係

ウルグアイ

2003(1ヶ月) 再派遣プログラムで再度同じ研究所、モンテビデオ市内の国立大学獣医学部水産研究所へ、前任者(讃井、汐月、佐藤、根本)の活動が定着しているか、供与機材の活用度・メンテナンス等が十分行われているか、鮓屋・刺身・酢漬け(マリナード)・魚肉練り製品(カニカマ)の普及等、アサード・肉食文化。

フィジー

2005(4ヶ月) 首都スバ市郊外南太平洋大学(U.S.P)の海洋科学研究学部へ水産加工の技術支援、かつお節製造、シーチキン、塩辛(酒盗)、燻製品、鮓、刺身、たたき、焼飯、アラ(魚の骨)スープ、魚体処理、漁獲物取扱い、市場での販売方法、フィジー人とインド人、英国の植民地でインド人が移住、人口比が半々、民族問題、生活習慣の違い、肥満と健康問題、和食の薦め、ヤンゴーナ原料→カバの儀式、タロイモ、ウム料理、焚火で蒸し焼き、南太平洋の楽園・観光地(リゾート)

ガボン

2005(1ヶ月) 横浜市の国立水産庁中央研究所で水産物の加工技術指導協力を JICA 専門家として実施、ガボンの水産省幹部職員 4 名の加工の実際・鮮度判定法、魚市場での実技実習、魚体処理、Work Shop の実施

2011 くまもと国際協力啓発月間
～聞いてみよう、世界の声～ JICA 熊本デスク

3月1日(火)～15日(火) 熊本市国際交流会館 1F ロビー・
熊本赤十字病院の国際救援 ～ハイチ・チリ地震救
援要員が選んだ写真展～

3月5日(土) 14時～16時 熊本市国際交流会館 2F ラウン
ジ・国際赤十字救援要員による体験談(ハイチ・チリ地
震救援要員)

3月12日(土) 熊本市国際交流会館 2F ラウンジ
・ NPOソルト・パヤタス(平成22年度福岡市国際貢
献賞受賞団体)「子どもたちを学校に!フィリピン、
ゴミ山周辺に住むお母さんたちの挑戦」
・ DVD 上映・活動紹介・刺繍体験・写真展示・パヤ
タス商品の紹介 写真展示3月12日(土)～24日(木)

3月19日(土) 午後2時～4時 熊本市国際交流会館
100人でやる“もしも世界が100人の村”in くまもと
桜井高志氏(桜井・法貴グローバル教育研究所:大分
県杵築市)

3月16日(火)～31日(木) 熊本市国際交流会館 1F ロビー
途上国の生活展示:JICA 地球ひろば展示物より
《3/26,27はSAKURA祭実施の為一時休止》

3月26日(土) 熊本市国際交流会館 4F 第3会議室
青年海外協力隊・途上国の料理教室&「世界の食
と途上国の現状」ワークショップ 協力隊帰国隊員
による任国の料理の試食と途上国の現状について
の体験談。

3月26日(土)、27日(日)
熊本市国際交流会館 1F JICA 紹介ブース
・ 熊本県青年海外協力協会「各国衣装展示&試着」
・ 熊本市立五福小学校国際交流活動紹介 4～6
年生国際クラブの国際交流活動について、
SAKURA祭 JICA ブースで展示を実施。当校は、
現在マダガスカルに赴任中の青年海外協力隊
を通じて、現地のボーイスカウトグループと文通
による交流を実施している。また、担当の清田
教諭が教師海外研修で訪問したシリアのダマス
カス大学の日本語学科学生との交流などを実
施している。

・ 同イベントを機会に「なんとかしなきゃプロジェクト」
サポーター登録キャンペーンを実施

会員の広場

新会員

汐月 卓也 (しおつき たくや)

略歴: 人吉市出身

鹿児島県立水産高校専門教諭 (1966～96)

派遣要員勤務歴:1996年8月 OFCF 海外漁業協力財団の登録専門家合格。

水産加工教育の海外派遣要員となる。1997(3ヶ月)JICA 国際協力機構の水産加工専門家としてモロッコ公国へ派遣。1997(1年)JICAのシニアボランティア水産加工の専門家として南米ウルグアイ国立大学獣医学部水産研究所へ派遣。2001(2.5ヶ月)JICA 短期専門家として北アフリカチュニジア国立漁民訓練センターへ水産教育顧問で派遣。2003(1ヶ月)JICA 再派遣プログラムでウルグアイの同じ研究所技術指導顧問として働く。2005(4ヶ月) 南太平洋フィジーへ南太平洋大学(U.S.P)の海洋科学研究学部へ水産加工の技術支援。2005(1ヶ月) 中央アフリカのガボン共和国の水産省幹部職員4名に横浜市の国立水産庁中央研究所で水産物の加工技術指導



○本年から、今年度の講演要旨のみを掲載するようにしました。

○この度汐月卓也会員が新たに加わりました。

○ご所属や住所変更、入会・退会会員などの連絡は下記事務局までお知らせ下さい。

事務局: 〒867-0034 水俣市袋1974-7 赤木 洋勝 電話 0966-63-1689 (自宅)

0966-63-0810 FAX 兼用 (国際水銀ラボ)

E-mail h610akagi@ybb.ne.jp